

「気にするなよ、おやじ」

三月は卒業式のシーズンである。卒業式といえば、私には忘れられない父との思い出がある。私の大学の卒業式に出席するため、それまで天草をほとんど離なれたことのなかった田舎者の父が、一人で博多までやってきたのである。私は驚いた。父は下宿の私の部屋に泊まった。

卒業式の朝、父は大学の門の前で立ち止まり、じっと、門を見つめたまま、しばらく動こうとはしなかった。学部ごとの謝恩会の席で、父と私は一箱の折り詰め弁当を分け合って食べた。そして、一合ビンの日本酒を、交互につぎ合って飲んだ。父は実に嬉しそうであった。私はその時の父の嬉しそうな顔を、今でも忘れることができない。

卒業式のあとで、私達は親友二人と共に、大濠公園に行った。親友達とも、その日でお別れであった。私は公園のベンチに座って、その親友達との別れを惜しんだのであった。父は少し離れてなぜか寂しそうに、私達を眺めていた。

翌日、父は黙って天草に帰って行った。しかし、その時の父のなぜか寂しそうな姿が、長い間ずっと、私の心の中から離れなかった。

その父が四年前に亡くなった。亡くなる一年ほど前に、入院して寝たきりになった父が、ベッドの中で、私の手をしっかりと握って言ったのである。

「お前の卒業式の日あの公園での悔しさは、今でも忘れん。金がなくて皆にジュースを買って、飲ませることもできんかった。本当にすまんかったな。おれは悔しくて、帰りの汽車の中で、涙が止まらんかった」

父は三十数年もの間、その時のことを、悔やみ続けていたのである。私はその時、八十八歳の父の心の風景をはっきりと見た。そして、卒業式の日の大濠公園での、あの父の寂しそうな姿を、三十六年たって、初めて理解できたのであった。私は仏壇にかざった父の写真を、しみじみと見ながら

「気にするなよ、おやじ」

とあらためて呼びかけている。



私の次男も今月～大学を卒業するのですが、どうしても、この父親に感情移入しながら読んで、思わずウルウルしてしまいました。私の場合、つい子供に・・・

『〇〇してやったのに！！』『〇〇してやったじゃないか！？』

という恩着せがましく小言を言う事が多く、遅ればせながら反省します。きっと子供たちから言わせると・・・

『仕事～仕事と自分の都合で全然自分たちの相手してくれなかったじゃないか！話を聞いてくれなかったじゃないか！』

という事になると思います。親は子供に「申し訳ない」という気持ちを持ち、それを少しずつ理解しながら子供は成長していく！！

お互い言葉には出さなくても深い所で分かり合って、思いやり合う。これが親子だろう！

卒業は旅立ちであり別れです。親子の数だけいろんな風景があると思いますが・・・皆様にとって（親も子も）人生の素晴らしい思い出が一つ増えられます事を願いお祈り申し上げます！！

P.S.

私は卒業し新たなスタートを切る次男にある本を一冊プレゼントしようと考えています！